
d d f d

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ddfd

【Z-17】

N
3
1
1
0
Y

【作者名】

宇ノ鹿
すい

【あらすじ】

あああああああああああつというあらずじはいい加減に
しなければ滅される。どうだろう。

わかった遊んでるかもしくは探ってるかのどっちかか、おかしな方向に行く事に怯えてフオローいれてきたかのどっちかだ！つってそれ二択じゃねえじゃん三択じゃん。

ああもう、そう知識を得たいなら頭良くなって試験受かって何年も勉強してそういうところにいけばいいんだよ、あそうだ私が以前より友達だけずっと連絡をシカトしていまや連絡を向こうからしてくれることもなくなつた頭の良い将来すごくなりそうな理系の彼のことを紹介してあげようかな、はっ、つって今思いついたけどやっぱり嫌だな……まっ、そうだね、彼のように私はなれませんか。

だって私は馬鹿ですからね（笑）つってもほら頑張つてんじゃん偉いじゃんつっても君とはそっか、いや、君からすれば少しは条件が一致するところがあるかもしれないけど、やっぱり一致しないところもあるのかな！ああ悪いけど俺はそこまで知的探究心もなくて、たまにただ生きてればそれで良いやとか思っちゃうよはは！だから生きるために馬鹿な私が生きていくために、空気というものを苦手とする私は、我慢ということが苦手な私は、チームワークで生活を得るという作業ではやっていけないと思つて、だから二年間もこんなキーボードとディスプレイに向かい合つてスカイプで話したり遊んだりしてた高校からの友達たちとも一切連絡とらなくしてもうおかしくなつて、ああ、つて感じになつてっからどうにかしてよとか甘えたくなるのも仕方ないじゃん！でも結果が出るまでは、つてのは意地でもそうだから結果でるまで私はディスプレイとキーボードだしやることは認められる小説を書く以外にあるわけないし、できるわけないじゃん。

余裕ある人間はそんなことにはならないつつの。あのね、私は言われたんですよ「君って顔はいいけどほんとそれだけだよな」うん、ありがとう顔を褒めてくれてありがとう自分でこの顔はむかつく時

があるし、なんとも表現しづらいよなと感じることもあるんだけど、その人はどういつつもりか知らんけど、煽りとかの意味もあつただろうけど、ええそういうことですねおかげさまでまだその言葉を覚えてますよ。他にもいろいろ覚えてる言葉はあるんだけどね、私は私なりにやれることはやっだし、アレ以上の状態には私が私であつた限りは達成不可能だつたんだつーの。私が悪いだけではありませんいろんな条件が複雑に絡み合い、ゆえに私にだけ責任があつたのではなく、親友に「どうしたの」と心配されても「わからない」としか返せなかったのは、彼を信頼していなかったのではなく、本当にわからなかった。何も言語化できなかった。混乱してたから。君はそんな僕と比べたら非常に頭が良いね。だつて言語化できてるんだもん。僕はアノ頃、何も言葉に出来ない阿呆だつた。あれこそ本当に白痴だつたと思うんだけど、どう思う？まじ馬鹿じゃね？だつてさ言葉にしようと思うとぐるぐるぐるぐるぐるぐるぐるしちゃうってそれで朝になつてたんだぜ？そんなんで学校いつて塾行つて夜の十一時くらいまで勉強しつつも友達とわいわいやつて家に帰つて、そつからもパソコンのスカイプで友達と、つて遊んでたんじゃん！とか言うのは禁句だよ。遊びは必要だつたんだあの時。それでも一応、頑張つてた理系の頭の良い奴みたいに頑張つたりはしてなかったとも言えるけど、私はあれでもぐるぐるぐるぐるだつたし、これからどうしようと切実に悩んでたし、何時死のうかと切実に悩んでいましたよええ。でも臆病者は死ねないんだって知ってる？そうだよ死ねねえんだよ馬鹿。馬鹿。そしたら生きるしかないじゃん生きるには生活が必要でしょ？そしたら当然、チームワークができないと悩む私には個人的な作業の割合が強い仕事が必要になつてくるでしょ？夢つて何だよ、趣味つてなんだよぶざけんじゃねえよ兼業つてなんだよそんな器用な脳味噌あるんだつたらさつさと死ねつて感じだよああごめんねちよつと感情入つたわ！

いや全部感情だけだね！もういいよこんな戯言！まあ本当はさつさと死ねつてのが一番なんだけど、まあそんな勇敢さもなく、何も考

えずにそれが出来るほどぼろぼろでもなかったらしく、結果的にこうしてうつすらとした平穩の中で、私がやってきたことはこのアカウント内で乗せられている文章の塊、小説、物語、でしょ？まあ乗せてないのももちろんあるよ。人生で最初に書こうとした長編は、今でも僕のPCのハードディスク内で息を潜めて、私が時たま自分を戒めるためにとつてあるよ。クソだよ。恥ずかしいよ。何このセクスのなさ。今も無い気がするときにあつて苦痛だけでもその頃はさらにひどいよ。ねえわかる。必死なわけよ。必死だからこうやって行間を空けないようにしないと困るってことだよ。そういう人間がさ、余裕なんてあるわけないじゃん。というわけで、ああごめんないね、って感じですよ。だってそうでしょ、ちよっと調子に乗ってたんだよね私。調子に乗って、勢いに身を任せて、ああでしやばったんだよ、でもいいでしょそんなくらいとか言っちゃうかんねだってもう、思春期は四年前にすぎたから。わからない、とか言つてふさぎ込んでた時期からもうね、時間ばかりがたっちゃってね。まあ塞ぎこんで書くことだけを始めたのは、二年前のことで。だからまあ、君たちはこうならないようにしてもいいし。本当はね、どうでもいいと思う時の方が圧倒的なわけなのさ。だから、知的好奇心なんてさほどない。そこは本当に困るね。アアそういう人なら良かったね。下劣な人間って、こうなんだよ。基本的には、さ。だから小説を書くことが出来るんだよ。

高貴に生きようと思ったら、小説なんてね、制約だらけになって、生活させてもらえないに決まってるって私は判断しましたからね。そういうわけで、本当はプライドなんて無い方が、たくさん小説はぶっ飛んだものと言うのかな、書きづらいものが書ける人間であつたほうが、需要があるのは当然だから、私は本当はそうなりたいんですよ。そこも一致しないところなんだろうな…。小説は多分身代わり作業、スケープゴートとして他者に内容を与えて、他者に満足してもらふという作業なのかもしれぬから、やっぱり自分のプライドによって下劣なものを書かないのでは、幅が狭くなるじゃん…。で

も高貴なものも人は求めるね確かに。だから高貴なものも書くこと
思う時があるよ。でも私自身は所詮下劣な、余裕のない、追い詰め
られた土竜ですよ。だから高貴なんてあるわけないじゃん。だか
らそれが一番嘘だと感じるんだよね自分としては。ちよつと笑つて
るよ、そういう言葉を書くときの自分自身に。でも、書くんだよね。
それはまあ何でだろうね。そういうのを理解するのが知的好奇心だ
としたら、ああ、大変だよ。いいな、って思うよ。羨ましいなっ
て思うよ。だから君がそうなりたいたのだったら、そういう人を探せ
ば良いと思うよ。探しなよ。あ、でも手伝わせてくれるなら手伝わ
せて欲しいな。君みたいな人、本当、すごいんだからさ。びつこ
りさせられるんだからさ。だからそうだね、気をつけた方がいいの
かもね。下劣な輩なんか、翻弄されないようにさ。それとも。あ
あでもあれだわ翻弄するなんてのは私は他人にそんなことをしてい
い人間ではありませんからね。自己評価が基本低いんですよ。てい
うか、低くなきゃだめなんだよね。それが何でかツツつたら、いろ
いろあるんだけどね。自己評価つてさ、でも低いせいで良くないこ
とを巻き起こすこともあるからさ、だからそれを裏切りたくて自己
評価を上げる作業をしたり、むちゃくちゃなことしたりするんじや
ん。でね、もう本当はめちゃくちゃが一番いいんだけどね。でも小
説書くのに使うツールとして、言語は、やっぱりある程度固定させ
て使用させていなくないと、小説としての形をなさないし、生活の
ための商売になつてくれないでしょ？結局そこありきなんだよ。私
は生きていかなければならない。そのための商売として、手段とし
て、大勢に認められる形としての小説を完成させなければならな
い。だから『こいつ馬鹿だな』なんて、そんなのは私にとっては本当は
成功例ですよ。愚かだな、と見られるのも成功例ですよ。一種の。
だって一々全てにつつかかつてたら、ページ数がやばくなるでしょ
？所詮、そういうことなんだよ。あまり長すぎるものを書いたら、
それこそ全てを解き明かそうとする志でいたら、一年にひとつ完成
させられたら良い方だよ。しかもそれでとりあえず、みたいな。

でも、あああそうだなやつぱり私は馬鹿ですからね、そういう印象が自分にあるほどに、考察とかを真剣にやってこなかった自覚があるからね、やつぱり、一年に一本というペースで全てを解き明かすような志で書いた方が、いいものが書けて、認められて、ね。でもしたらばだよ。所詮一つしか選択できないんだ。私はたくさん書いてたくさん書いてどんどん消化していく、ということを選択した。また同時に、これで小説を認められるまでずっと書き続けるということも選択した。（もちろんそれは周囲の助けがあるからできる選択だ。私はそのことを忘れてはいけないとは思う）でも人って助けられたからって……っていう風に複雑怪奇な関係性だもんね。ああ、結局こうなるんだよ。いつだって結論なんて何一つ出ないんだよ。わかるのは私が荒ぶっているという程度のことだよ。ああ、ゲームやる嘘だけど。ゲームなんてやってらんねえよ。私は余裕のない思春期を脱したつもりのただの馬鹿。そういうことを言いつつも心の中では（でも長編をたくさん書くことができる）と自惚れている。その自惚れが砕かれた時、私は本当にただの馬鹿として、さらに朽ち果てて、どうしようもなくなる、みたいな。はは、っていうことだよ。結局それに集約されるよ。四年前と何も変わってない。わからない、という自分と結局何も変わっちゃいない。今はそれが少し短くなって、ははっ、というのに集約された。そういうことでした、ははっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3110y/>

d d f d

2011年11月15日13時38分発行